

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00497

研究課題名(和文)ドイツ語未来形における現在の推量用法の成立についての研究

研究課題名(英文)On the establishment of the epistemic uses of German future

研究代表者

嶋崎 啓 (Shimazaki, Satoru)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：60400206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ語の未来形における現在の事態の推量を表す用法がどのように発達したのかという問題においては、未来のことも現在のことも同時に表す一般論を表す用法がもたれている。一般論においては未来か現在かという区別が難しいために、未来形の現在の推量を表す用法が始まった時期を確定できないが、そのような不明瞭な成立こそが現在の推量を表す未来形の成立の実態であったと考えられる。ただし、法助動詞+完了不定詞における認識的用法が過去の推量を表す未来完了形の成立を促し、そこから未来形の現在の推量の用法が確立した可能性も残される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

もしドイツ語の未来形の現在の事態についての推量の用法が、未来も現在も表す一般論の用法にもとづくとするならば、他の言語においても見られる未来形の現在の推量の用法が同じように一般論的用法にもとづく可能性があると言える。その場合、言語の違いを超えて人間の思考の枠組みの類似が世代がつながる歴史的名時間の中で見られることになる。その意味ではこの未来形の研究は言語学全般にとって有益であるだけでなく、人類学的にも人間の普遍性を表す事例を提供することができると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The German future to express inferences about a present state is based on the use of the German future which expresses general statements both in the future and in the present. It is difficult to distinguish between the future and the present in generalizations, therefore it is not possible to determine when the use of the future tense to express inferences about the present time began, but such ambiguous formulations are the real state how the use of the future to express inferences about the present time began. However, there remains a possibility that the epistemic usage of the modal verb + perfect infinitive influenced the establishment of the future perfect that expresses speculation about the past, and from there the usage of the future for inferences in the present time was established.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：ドイツ語学 歴史言語学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語の未来形は未来の事態だけではなく、Er wird krank sein. 「彼は病気だろう」のように現在の事態についての推量も表すことができる。英語の未来形 <will + 不定詞(= 原形)> も、That'll be the postman. 「あれは郵便配達人だろう」のように、現在の事態についての推量を表すことができる。英語の will はもともと「～しようと思う」という「意志」を表し、ドイツ語の werden は「なる」という「生成」を表すので、本来の意味はまったく異なる。しかし、「意志」も「生成」もどちらも、これらの動詞が直説法現在形で用いられるかぎり、これから先の未来の事態を表す点では一致しており、これらの動詞自体には現在時の推量を表す意味的要素がまったくない。そして、「意志」と「生成」という異なる意味を持つ動詞から未来形が作られ、どちらも現在時の推量の意味を表すことができるということは、汎言語的に未来を表す未来形は現在時の推量の用法を派生的に生み出すという可能性を示唆する。

未来形が未来だけではなく、現在時の推量を表すことについては、未来の出来事も、現在において推量される事態も、その文を発話する現在時においてはどちらもまだ確定しておらず、「不確定」ということで共通すると言う見解がある(例えば、Paul, Hermann: Deutsche Grammatik, Bd. 4, Halle: Niemeyer 1920, p. 153)。しかし、「不確定」という共通点だけで、未来を表す用法から現在時の推量の用法が生まれるという説明は不十分である。これまでの調査では、まず 15 世紀に Er wird kommen. 「彼は来るだろう」のような未来を表す未来形が発達したあとで、16 世紀に入って、Er wird krank sein. 「彼は病気だろう」のような現在時の推量を表す用法が発達したことが分かっている。そこで問題になるのは、Er wird kommen. 「彼は来るだろう」のような未来を表す未来形がどの程度話し手の推量の意味を持つのかということである。もし、Er wird kommen. 「彼は来るだろう」が単に未来を表すがゆえに「不確定」であり、特別に「推量」の意味を持たないのであれば、Er wird krank sein. 「彼は病気だろう」のような「推量」を表す未来形とは意味が異なるということになる。しかし、もし Er wird kommen. 「彼は来るだろう」が Er wird krank sein. 「彼は病気だろう」と同等の「推量」を表すとすれば、時間的に未来が現在かという違いがあるだけで、「推量」という点では同じだということになる。そしてもしそうだとすると、werden はもともと「なる」を意味し、この動詞自体には「推量」の意味がないのだから、werden が未来を表す未来形の助動詞になった時点で werden の意味が変容して、「推量」の意味を持つようになったと考えねばならない。

werden が「なる」を意味する(8世紀～) <werden + 不定詞> が未来を表す未来形となり、同時に未来の出来事についての「推量」の意味を持つ(15世紀～) <werden + 不定詞> が現在時の推量も表すようになる(16世紀～)

ただし、これまでに収集した 15 世紀の未来を表す未来形の用例には、「推量」の意味を表すとは考えがたい用例があり(例えば、wenn er kommen wird ... 「もし彼が来れば」のように条件を表す従属文で未来形を用いた場合)、上の仮説の妥当性は具体的な用例をさらに収集して慎重に検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ語の未来形がいかにして現在時の推量の用法を可能にしたのかを明らかにすることである。ドイツ語の未来形において現在時の推量の用法が一般化したのが 16 世紀であるということはずでに定説であり(例えば、Eber, Robert et al.: Frühneuhochdeutsche Grammatik, Tübingen: Niemeyer 1993, p. 391)。特に新しい知見ではない。しかし、<werden + 不定詞> が未来を表すようになった時点で始めから「推量」の意味を持っていたのかということに着目した研究はない。例えば、ドイツ語の未来形の成立過程を考察した研究としては、Kotin, Michail L.: Die werden-Perspektive und die werden-Periphrasen im Deutschen, Frankfurt a. M.: Lang 2003 が最も詳しいが、未来形が未来を表す場合にどの程度の推量意味を持つかということには触れていない。その点を明らかにすることが一つの目的となる。

そして、現代ドイツ語の未来形について、未来形は未来の出来事を表す場合も現在の事態を表す場合も「推量」を表すという見解(Vater, Heinz: Werden als Modalverb, in: Calbert, P. Joseph/Vater, Hainz: Aspekte der Modalität, Tübingen: Narr 1975, pp.71-148)と、未来形は現在の事態を表す場合は推量の意味を持つが、未来の出来事を表す場合は推量の意味を含まず、純粋な未来を表すという見解(Matzel, Klaus/Ulvestad, Bjarne: Futur I und futurisches Präsens, in: Sprachwissenschaft. 7 (1982), pp. 282-328)があるが、本研究は歴史的な研究の立場から、現代ドイツ語の未来を表す未来形における推量について新たな説明を与えることを目指す。

3. 研究の方法

現在の事態についての推量を表す未来形は *Er wird krank sein*. 「彼は病気だろう」の *sein* のように静的な状態を表す動詞の不定詞からしか作られない。そこで、不定詞の動詞がどのような意味を持つかという点を一つの分類の基準とする。また、未来形が「～するならば」のような条件を表す従属文中で未来形が使われているかということも分類の基準とする。上で述べたように、条件文中で用いられた未来形は推量の意味を持たないと考えられるためである。また、話し手の判断度合を表す副詞をともなっているかということにも留意する。なぜなら、例えば、*Er wird wahrscheinlich kommen*. 「彼はおそらく来るだろう」のように副詞 *wahrscheinlich* 「おそらく」をともなう場合、わざわざ副詞によって「おそらく」という「推量」を表しているので、未来形自体には推量の意味がないと考えられるからである。

もう一つ、用例調査の際に留意すべきものは、未来形の変種として不定詞が完了不定詞(過去分詞 + *haben* もしくは過去分詞 + *sein*) となる未来完了形である。これは「未来」完了という呼び名に反して、通常、*Er wird es getan haben*. 「彼はそれを行ったのだろう」のように「過去」の出来事についての推量を表す。申請者の調査では未来完了形は 16 世紀後半には現れており、やはり過去の推量を表すことが分かっている。未来完了形が現在時の推量を表す未来形と意味的に連動していることは明らかなので、これがいつ頃どのようにして用いられるようになったかについても確定したい。

これまでの調査では、15 世紀初頭に成立した *Der Ring*, 1484 年に刊行された *Tristrant*, 1509 年刊行の *Fortunatus*, 1587 年刊行の *Doktor Faustus* といった資料からすべての未来形を収集して用法を分類した結果、15 世紀初頭の *Der Ring* から 15 世紀後半の *Tristrant* までにはあまり未来形が現れず、未来形が時制として確立したと言えるほどに現れるのは 16 世紀後半の *Doktor Faustus* においてである。しかし、*Doktor Faustus* においても、現在時の推量を表すと解釈可能な例はあるが、解釈可能なだけではっきり現在時の推量を表すとまでは言えない例がほとんどである。ところが、*Doktor Faustus* には過去の推量を表す未来完了形の例は数例あり、また、*Doktor Faustus* よりも早い、*Hans Sachs* の 16 世紀前半の謝肉祭劇には数例ある程度明瞭に現在時の推量を表すと考えられる例が現れるので、*Doktor Faustus* には偶然現れていないが、この時代にはすでに現在時の推量の用法が可能になっていたと考えられる。そこで、16 世紀の調査資料を増やして、現在時の推量を表す未来形の調査を行い、その上で、15 世紀において未来を表す未来形がどの程度推量の意味を持つのかを調べる。

4. 研究成果

未来形の現在時の推量の用法は *Er muss krank sein*. 「彼は病気にちがいない」や *Er kann krank sein*. 「彼は病気かもしれない」のような法助動詞の認識的用法と類似すると言われる。そこで法助動詞の認識的用法を調べたところ、法助動詞の認識的用法は中高ドイツ語にすでにあるが、初期新高ドイツ語においてもあまり数は多くないことが分かった。この点についての評価は難しいが、法助動詞の根源的用法から認識的用法への発達が、未来形における時制用法から推量用法への発達に影響を与えたということは考えられないわけではないが、直接的に関連するとは言いがたいことが分かった。未来形が現在時の推量を表すことが様々な言語で見られることを考えると、法助動詞からの影響よりも、未来形という時制が内在的に持つ意味の多様性に起因すると見なすべきだと思われる。

但し、明瞭な未来形の推量用法の確立は未来完了形 (*werden* の直説法現在 + 完了不定詞、過去の事態についての現在の推量を表す) の成立によって裏付けられるのであり、その最も古い例は今のところ 1587 年の *Doktor Faustus* において現れるのに対し、法助動詞 + 完了不定詞における認識的用法の例は 1498 年の *Tristrant* にすでに見られるので、法助動詞の認識的用法が未来形の推量用法の発達に影響を与えたとは言えないとしても、未来完了形の過去における推量が法助動詞 + 完了不定詞における認識的用法にもとづくことは十分に考えられる。まだ結論を下すことはできないが、法助動詞 + 完了不定詞における認識的用法が過去の推量を表す未来完了形の成立を促し、そこから未来形の現在時の推量の用法が確立した可能性も残されている。(なお、未来完了形が未来の事態の完了を表す例は初期新高ドイツ語にも現代ドイツ語にもほとんどない。) その際、完了不定詞が過去を表すようになったことが背景となっており、そこには初期新高ドイツ語期における現在完了形の過去時制化が大きな影響を与えたと言える。

しかし、実際の多くの例から予想されることは、未来形の現在時の推量の用法の起源が一般論を表す用法にあるということである。事例では、これからいつでも起こる一般論として未来の事態を表すか、現在の事態の推量を表すかが区別できない場合が多い。そのように一般論を表す場合との区別が難しいために、未来形の現在時の推量を表す用法がいつ始まったかは確定しがたいが、実質的には、未来とも現在ともどちらとも解釈可能な用法が多く使用される中で推量の用法が確立したと見なすのが最も正しいと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 嶋崎啓	4. 巻 -
2. 論文標題 ドイツ語の自由間接話法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 語りと主観性	6. 最初と最後の頁 49-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 嶋崎啓
2. 発表標題 条件文に用いられる未来形
3. 学会等名 東北ドイツ文学会第64回研究発表会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------